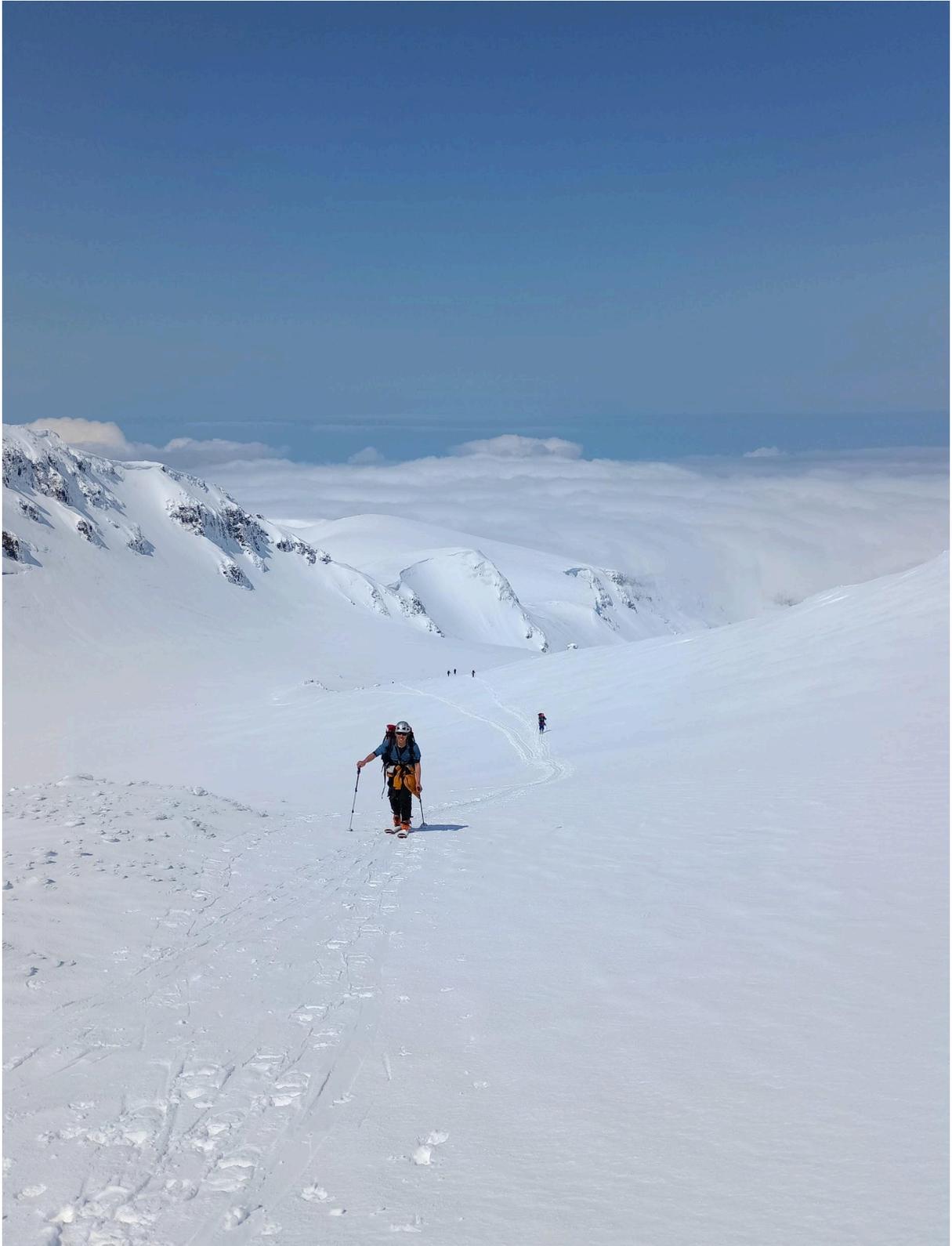


主要山行記録まとめ 原稿

分責: 池見JAMES

4月 東北スキー



快晴の鳥海山



東吾妻山から滑降

[吾妻連峰スキー縦走山行記録]

京都から700kmを夜間行軍にて突貫し、小雨降る中予定通りの8時にはスキー場に着了。リフトで標高1600mまで上がると、降水は雪転しており、森は真っ白になっていた。視界がないのはなんだかと思いつつ、ひと登りするともう西大巔だ。予想通り尾根はただ広く、地形の特徴に乏しい、以降中吾妻山までずっとコンパス

を切って進んだ。シュカブラに苦勞しながら1時間も歩けば西吾妻に着いた。特に山頂という感は無いが、最高峰ということで記念撮影。山頂では流石に風が冷たかった。北に少し進んだ梵天岩からは、中大巔を巻いていこうということでトラバースに入ったが、トラバース始めてすぐのさほど急ではない場所で先頭を歩いていた池見が斜面中に何故か形成されていた雪庇を抜いて転落した。当時は雲が厚くて光量が足りず、地形の起伏が全く見えなかった。てっきりシュカブラかと思って踏み込むと、地面がなかった。

トラバースは完了した。天候もやや好転し、丘陵のような山が連なるのがよく見えるようになった。続く1860峰と藤十郎も南側を巻いた。東大巔も、リミットの関門に何とか間に合いそうだったので、巻いた。相変わらず山稜は緩く、締まりがない。継森を越えた。1933峰を巻き気味に登り、ようやく中吾妻山に着いた。中吾妻に至る尾根は、主稜線より細く、樹間も狭かったので苦勞した。滑走は、良かった。固い旧雪に乗った今朝からの新雪は不安定だったが、そもそも雪崩れるほど積もっていなかったのも特に心配はなかった。谷地平に入ると斜度がなくなり、樹幹も狭まったが、GPSの力も借りながら通過。遂に小屋かと思ったところ、大倉川源流の流れが行く手を阻んだ。悲しきかな、スキーはcreek程の流れにも無力である。脱いだ板を支えにして男気渡渉を敢行。水面に出た石を繋いでなんとか渡ったが、加納は今シーズンの沢初めを飾ってしまったらしい。可哀想に。谷地平小屋に着いたのは日没の直前だった。内部は快適の一言に尽きた。地面が暖かいというのは素晴らしい。3シーズンシュラフでも快眠だった。

2日目は5時に出発する予定だったが、加納のシールが粘着力を失ってしまい、全く接着しなくなるというトラブルに見舞われた。結局原因は不明。テープでぐるぐる巻きにして対応した。この日は高気圧に覆われて、天候は回復傾向にあったが、朝から晴れたり曇ったりのスッキリしない天気だった。前大巔を北から回り込むように一切経山を目指す。山頂まであとわずかに迫ったところで、体がよろめくほどの強風に襲われた。舞い上がった氷が顔に当たって痛い。逃げ出すように山頂を離れたが、風下に行きたいあまりに滑走ラインを東に取りすぎてしまい、急斜面地に入るところだった。少々登り返して解決。酸ヶ平は一面の雪原になっていて、それが日が差すと真っ白に輝いて大変綺麗だった。200mの最後の登りで東吾妻山へ、意外にもここでは風は大したことはなかった。下りでは、樹幹が狭く、地形の特徴にも乏しかったため、滑走のナビゲーションに苦勞した。また、下部では昇温によって雪が激重になっていて、筋力をゴリゴリ削られた。1200mからは林道にスノーモービルのトレースがあったので、楽に下ることが出来た。蒲谷地からは根性のサイクリングで車を回収し、16時ごろにようやく完全下山できた。

5月 魚沼三山



池ノ塔から藪尾根の彼方に越後駒ヶ岳を望む

[魚沼三山縦走山行記録]

金曜日の20時半に京都を出発。一路魚沼へ車を走らせる。1時間遅れくらいで登山口近くまで行ったら道路が残雪に塞がれていて、これによる歩きで更にプラス1時間。締めて2時間遅れで行動していく。センノ沢は出合より見上げる分には問題なく雪で埋まっており、今年が多雪に感謝したところである。高倉沢の雪溪の確認のた

め、池見、赤嶺、加納、梅田で偵察隊を出した。高倉沢本流の雪渓は大丈夫そうだが、問題は水無川の渡渉部。高倉沢出合のまさにその場所では水無川を渡す橋は落ちていたが、50mほど上流を見ると厚さ5m以上はあるだろうという立派なスノーブリッジが架かっていた。問題なく通行できそうだが、やはり多雪のおかげか。戻ってセンノ沢に入る。念の為間隔を開けて流芯を避けて登っていく。太陽が隠れているため、雪は締まっていてとても歩きやすい。標高700m辺りで沢は三俣になっていた。左俣には大きな音と水しぶきのみが見える滝が架かり、中俣は藪っぽい沢、右俣は雪渓が繋がっていた。意気揚々と傾斜の強い右俣に入るが、すぐにGPSがルート間違いを教えてくれた。水量を考えると、どうやら直登の絶望的な左俣が本流のようだ。これは引き返しかと思いつつ、一応取り付けそうな中俣を赤嶺と偵察に行くことに。木ヤブを潜り乗り越して進んでいくと右岸に鹿道を発見。導かれるままに進んでいくと小尾根を越えて雪の残る谷状に出た。さらにもうひと登りして、比高僅かな尾根をまた越えると、あっさり左俣に出た。雪の量も明らかに増して、安心である。三俣で待つみんなを案内して、更に進む。徐々に傾斜が増してきて、アイゼンに不慣れな者は苦労していた。振り返ると標高1000m弱まで上がってきている新緑前線と、不気味な岩峰と雪崩の茶色い跡で威圧してくる八海山があった。雪は標高1200mまで繋がっていた。尾根に乗り上がると、全く無雪の藪尾根が出迎えた。意を決して飛び込むと、意外に藪の密度は薄く、簡単に道を開けてくれた。なんだ楽勝ではないかと鼻歌交じりに歩きたいほど上機嫌に進んでいくと、池ノ塔に100mほどまで迫ったところから事情が一変した。尾根上にはよくぞこの厳しい環境下でここまで育ったと感じるような太いマツが通せんぼし、その隙間はイチイやシャクナゲが埋めていた。それからは長い格闘が始まった。枝を捻じ伏せ、時には潜り抜け、一步毎に引っ掛かるアイゼンやピッケルにやり場のない怒りを覚える。池ノ塔を越えても状況は好転しなかった。尾根の左側は200mはあろうかという絶壁で、右側は通行を許さない高圧の藪が塞いだ。我々が行くのは絶壁の縁のわずかに枝の薄い領域。唯一の救いは切れ落ちた金山谷と雲の晴れてきた越後駒ヶ岳の展望ぐらいだろうか。池ノ塔から1400を越える無名ピークまでの500mに2時間を費やした。そこから200m先の露岩地帯まで1時間。オツルミズ沢へ下降できる鞍部を70m先に認めたが、到達には30分を要した。オツルミズ沢に降りたのは17時半。最早ヘッデン行動は確実となった。留まれば凍える夜が来る。進めば駒の小屋が、我々を待っているはずだ。進むより他に選択肢はない。皆疲れ切った体に鞭を打ち、覇気のない足取りで進んでいく。やがて暗くなった。小屋までもう一息というところで、雪切れが行く手を阻んだ。しかしもう後には退けない。覚悟を決めて右岸の笹藪に突っ込むと数分の格闘で水流を巻けた。この時は誰も気付かなかつたが、山田の片方のアイゼンがここで脱落してしまつたらしく、二度と回収できなかった。21時前になってようやく小屋に着いた。GWにも関わらず、小屋は貸し切りだった。水も出ていた。銀マットと毛布もあった。その晩は皆、泥のように眠った。

1日停滞して3日目午前2時に起床。午前4時、アイゼンを紛失した山田を残して7人で出発。山田は片方ツボ足で銀山平に下ろした。登り始めてすぐに越後駒ヶ岳に登頂。朝の空気が気持ちよく、山復た山の圧巻の景色であった。主稜線の南下を開始する。東側に残った雪庇の残りの上は、締まっていてとても歩きやすい。しかしクシガハナ尾根の頭を過ぎてからは残雪はほとんど消えてしまった。アイゼンで登山道を歩くのは、やりづらい。さらに鞍部に近づくにつれ風が強くなり、一時は体が煽られるほどまでになった。いくつかのアップダウンを越えて、天狗平、檜廊下を経て中ノ岳へ。中ノ岳直下も雪が着いていて楽に歩けた。残念ながら山頂だけ雲の中で、風もあって長居はできなかった。中ノ岳から御月山との鞍部まではやや斜度の強い一枚の大斜面になっていて、慎重に降りていった。下部ではシリセードを試してみたが、タイミング悪く雪に日が当たり、柔らかくなってしまったので全然滑らなかった。そのままの流れで御月山に登り返し、ピークに着いた時には天候はすっかり回復して暑いぐらいになっていた。最低鞍部に向けて500mも下っていく。すぐに雪がなくなり、露出した登山道をアイゼンの金属音を響かせながら歩く。出雲崎を過ぎたところで、一箇所急な藪の壁が現れた。雪渓に乗ることもできそうだったが、谷に向かって嬉しくない繋がり方をしている、滑るとあの世行きの状況だったので懸垂下降をすることにした。藪がロープに絡んで多少苦労して、1時間弱を要した。これより先しばらくは雪がなさそうだったのでアイゼンを外して鎖や岩、枝にやや難アリの縦走路を進んでいった。最低鞍部のオカメノゾキを過ぎて登りにかかる。すぐに尾根上に残雪が細くリッジ状に残っていて、緊張する場面が出てくる。残雪処理の周りで雪壁の登下降を強いられ、不慣れな者は見ていると怖かった。日が傾いてくる中、気の抜けない道をゆく。今日も疲れている者は本当にバテバテで、ペースが上がらない。何とか明るいうちに縦走路を抜けて、18時に五龍岳に辿り着いた。緩斜面を整理して二張分のスペースを確保する。飯を食って、雪から水を作って、21時ごろ就寝。最終日の5月6日は、最悪のスタートであった。2時に起きると、レインフライから聞こえないはずの音、聞こえてはいけぬ音が響く。外は予報にはない雨が降っていた。これでは雪崩が怖くて高倉沢へは行けない。濡れた鎖と岩ではハツ峰を越えていくのもダメだ。ここは阿寺山へ逃げるしかない。全員暗い気持ちで撤収を進め、4時半にすべての撤収を完了。この時点で、雲底は意外に高く、雨の降り方も何となく穏やかだったので、目前に迫った八海山登頂を諦めきれず、池見、加納のアタック班とそれ以外の5人の下山班に一時的に別れて行動することにした。下山班の指揮は赤嶺に一任した。アタック班は順調に残雪と藪を繋ぎ、5時半前には入道岳の山頂に立った。越後駒ヶ岳も中ノ岳も、薄暗い空の下に重厚な山容を見せてくれた。登頂後は最高速で下山班を

追いかけて、阿寺山で追いついた。新緑を愛で、フキノトウを摘みながらゆっくり下りて行った。下山後はヒッチハイクにて車を回収。満足感の高い山行になった。

7 中御所谷

中御所本谷から宝剣岳中央稜を継続。スケールの大きな沢で直登できない滝も多いが展望があって楽しい遡行。滝の巻きもしっかり頭を使ってルートファインディングするのが楽しい。日程の都合で沢下降できなかつたのが心残り。周回すれば美しいラインがとれる。



中御所谷遡行中、草付きを巻いていく。

8月 刃合宿

毎年恒例の夏合宿は剣沢ベースで行った。当初予定していた日程は大雨であったため日程を延期し終始晴れのなか楽しい合宿となった。

1日目は入山及び雪上訓練。昨年より多い残雪のおかげで充実した訓練ができた。

2日目は源次郎尾根。難しくない尾根ではあるが何度来ても楽しい。

3日目は本峰南壁とハッ峰上半に分かれて行動。長次郎谷の雪渓も割れが少ない。

4日目はレストを兼ねて立山三山周遊や仙人池往復を楽しんだ。

5日目は下山日だが一部メンバーで龍王岳三峰南壁のジェードルを登攀した。VI級程度の登攀が続き痺れた。楽しみすぎてアルペンルートに乗り損ねるところだったが。



長次郎谷を詰める



ジェードルの末端ピナクルにロープを伸ばす

8月 北葛沢

北葛橋から沢床には楽に下りられる。花崗岩の白い岩、北アルプスらしい冷たい水に囲まれ胸が高ぶる。入溪してすぐ下部ゴルジュになる。滑りはなくフリクションが良く効く。ゴルジュ内は泳ぎも無くフリークライムで楽しく突破できる。幅2メートルほどの狭い廊下内の小滝では人工登攀で側壁からバンド伝いに巻く。悪い巻きも高巻きも強いられないので水線近くを辿って満足のいく遡行ができた。ノーザイルでスルスル登り、予想より早く下部ゴルジュが終わる。ゴルジュ後の楽しい河原歩きは一瞬で終わり上部ゴルジュに入ると滝が連続する。下部ゴルジュに泊適地は無いが、上部ゴルジュから先は割とどこでも泊まれそうである。ほとんどの滝が直登でき、七釜手前の滝では洞窟ぐぐりを交えた巻き終えた珍しい巻き方をした。七釜は綺麗な釜と滝が連続する綺麗な地形。二段目くらいまでなら登ることができるのではないかと。内部に入って探索する勇気は出なかった。七釜は藪漕ぎをしつつ巻いて沢に復帰。河原の手頃な天場で幕。翌日は乗越への詰めあがりのみ。見ごたえのある枝沢や滝が兩岸から流れ込む。天場すぐの蓮華岳に突き上げる支沢には巨爆が落ちておりそられる。雪ブロックが数か所、スノーブリッジが二か所ほどあって潜ったり巻いたりする。最後の詰め上りはガレガレザレザレだが悪くは感じない。乗越からはコケモモやクロウソグなどベリー類がたわわに実る登山道を辿る。アップダウンで汗はダラダラ。一歩ごとに実を啄みながら船窪小屋まで。後立の稜線から見る黒部の山々は美しい。冬山に思いを馳せながら楽しく下山した。



下部ゴルジュの核心、意外にも水深は浅い



七釜、自然の造形美

12月 白山



弥陀ヶ原で歩いてきた稜線から朝日が昇る

[白山山行記録]

初めて石徹白から別山を目指したのは昨年の12月中旬であった。その折はシーズン初めの寒波に襲われ、登山口時点から40cm程まで積もった雪に追い返されたものであったが、さて今年はどうか。予定4泊5日予備日2日の長期山行の始まりだ。12月中旬から異常に暖かかったのが、前日26日に寒気が入ってくるということで心配していたが、蓋を開けてみると登山口の白山中居神社で10cm以下と、稜線の内陸側では大したことはなかった。白山中居神社に着いたのは2時、星空の穏やかな天候で、準備を終えてルームカーを回送してくれる小田に見送られ、3時出発。6kmの林道は登るごとに積雪が増していき、石徹白登山口では20cmとなった。登山口の東屋でなんとなくワカンを履く。去年は尾根伝いに直登したのが、今年は夏道でないと通れなかった。やがて積雪は増していき、膝下ラッセルくらいにはなった。日も上がってしまったが、遅々として進まなかった去年に比べると、受け入れがたいほどのスピードで登っていった。神鳩ノ宮避難小屋には7時半着。小屋の冬囲いが一部外されていたり、中に雪が入っていたりと不思議な人の痕跡があった。8時出発。尾根は木がなくなっていく、時折差し込む光に野伏ヶ岳や丸山が照らされる眺めが望めた。母御岩を越え稜線に上がると風当たりのよい銚子ヶ峰手前の平地はカリカリにクラストしており、大変歩きやすかった。しかしそれをすぎると尾根は細って雪庇が出てくるようになり、吹き溜まりでは膝上まで埋まる稜線が始まった。視界も悪く、雪面の凹凸が分かりにくい。皆寝不足に苦しめられながら、一ノ峰、二ノ峰を越えたところでなんとトレースが現れる。導かれるように三ノ峰避難小屋へ至る。中には25日から入山していたという二人組が居た。互いに別のパーティに出会うとは全くもって想定外で、こちらとしては幸運なことだった。

翌28日、小屋を出ると雲の下に遠く大野の町が望めた。前述の二人パーティは別山が目的地とのことで、夜明けより前に出てトレースを拓いてくれていた。標高を上げていくと植生が薄くなってきた。別山平は地形図の通り真っ平らになっていて、視界がないと方向を失いそうだ。稜線を

登ってゆき、やや強い風の中別山に登頂。昨年のリベンジができて感無量。進む先には白山が遥かな遠さで横たわっていた。別山より先は尾根が細っているということで、しばしカンジキを脱いで歩いた。風に叩かれた場所ではさして沈まず、問題はない。ここの細尾根は雪庇が発達してくると怖いだらう。強風のよいところで、稜線の雪はかなり締まっており、順調なペースで大屏風ノ頭に到着。ここでようやく風を避けて一息つくことができた。以北では稜線の西側が緩やかになり、稜線まで針葉樹が並ぶようになった。こうなると寒さは抑えられるが木の吹き溜まりとなり、雪が深くなる。再びワカンを装着して進む。天候はますます良くなっていき、牧歌的とすら言えるほどの稜線逍遥を楽しんだ。南竜ヶ馬場に着く頃には、快晴無風、気温も高く、一切の緊張を解いてしまえるほど平和な昼になっていた。白山室堂に向け登っていく。ここは視界がなければナビゲーションの核心となるところだったが、その心配は全くなく、尾根に取り付くまでのラッセルがやや重かったぎり何もかも順調だった。白山室堂付近も西風の影響を強く受けており、歩きやすい。白山室堂には昼過ぎの到着。こんな日にアタックに出掛けない選択はなく、小屋に荷物を投げ込み、山頂を取りに行く。山頂近くは一切の植生が埋まっていた。直下の10mほどが少し急だったが、問題になることはなく、白山本峰、御前峰に登頂。白山の山名は間違いなくこのテーブルクロスに覆われたような白くなだらかな姿から来ているのであり、これのみを以て白山登山の本来は冬期登頂にあると主張することができるだろう。山頂からは日本海から中部山岳の眺めを恣にできた。下山はあつという間で、今日も小屋に泊まれる幸せさを噛み締めた。

29日は、下山にエスケープを用いることにした。大義名分はこの日の午後から天気が荒れてきて、稜線上の行動に懸念があること。動機は来たのと違う道で下りたい気持ちである。弥陀ヶ原から尾根伝いに下っていく途中、別山への稜線から朝日が上がった。これが初日の出であつたらどんなに素晴らしかったことだろう。行程があまりに順調でやや不満があつた。下りながら甚之助避難小屋へ谷をトラバースする場所を探す。地図で見るとよりも顕著な地形で、怖い。針葉樹林帯を用いて谷に近づき、ピットチェック。深い層から順に、70,50,30cmに弱層があり、70cm以深と70~50cmのそ層では硬さの逆層構造が見られた。50cm以浅は、26日の雪と思われるが、その層の中にもテストで破断するまで認識できなかった弱層があつた。やはりピットチェックは大事だ。30cmの弱層はひじ10回で破断した。トラバースは無事終わり、広い尾根を下っていく。雪は急激に重さを増していき、暑さと雪質、藪に難儀した。2時間ほどで別当出合の吊り橋。ここは踏み板が外されていて、中央の靴幅の鉄骨を歩く必要がある。冗談抜きでここが一番怖かつた。さて別当出合には11時着。積雪深は60cmほどか、雪崩の危険性は皆無と判断し、修行の林道歩きに突入。時速3kmとかなりのハイペースで進んだが、最後の方はゾンビになっていた。除雪終点に到着すると同時に雨が降り始め、悲惨な帰路になるはずだったのが、救世主、OBのスナメリさんのご実家に泊めていただき、天国のような環境で迎えの車を待つことができた。